

『劔岳 点の記』 追っかけ奮闘記(中編その1)

牧野美知子

(国立富山高専英語非常勤講師)

さて、追っかけとして足掛け3年にわたって情熱を注ぎ込んだ『劔岳 点の記』は、つい最近の日本アカデミー賞最優秀賞6冠という素晴らしいニュースで頂点を極めた。木村監督はキネマ旬報の新人監督賞など、数々の賞を受賞し、日本アカデミー賞では期待通り、最優秀監督賞と撮影賞をダブル受賞したのだった。私自身、この映画は命がけて追っかけする価値があると、スタートした時点で決断したとはいえ、今日のこの栄光を露ほども予想できただろうか？

2年目の2008年3月下旬、映画のロケは犬山市の明治村で再開された。映画では陸地測量部でのシーンと、柴崎さんを乗せたSLが富山駅に到着する場面、また柴崎さんの新婚の家庭などを撮って、4月7日、いよいよ富山での2年目のロケが芦峯寺の雄山神社でスタートした。昨年秋の芦峯寺嶋家のロケから半年が経ち、その再開をどれほど待ち望んでいたことか。やはりスケジュールを教えて頂き駆けつけて、雄山神社の境内で俳優さんや木村監督にまた応援のエールを送ることができた。俳優さんは昨年の浅野さんと香川さんに加え、測量隊の松田龍平さんやモロ師岡さんなど5人加わった。



木村監督(右)と再会した私(中)とパートナー 和子さん

この日は、プレス向けの監督・俳優全員記者会見と、長次郎が息子を殴る迫真の場面がパフォーマンスされた。周辺での撮影後、10日にはまだ一般には開通前の雪の大谷を、水道も凍って宿泊準備もままならぬ天狗平山荘へ向かった。去年は炎天下、今度のスタートは、ま

だ山は氷点下20度の真冬の雪の中だった。

そして再び山を降りたロケ隊と出会ったのは、6月7日から2日間行われた、富山市郊外の昔の豪農浮田家でのロケだった。立山温泉にみたくてた浮田家は、私の家と職場の中間地点にあり、毎日、行き帰り立ち寄ることが出来た嬉しいロケ地だった。トラックで立山の雪が浮田家の庭に運び込まれ、近所の人たちもロケを一目見ようとやって来た。

2日目に行ったとき、門の外に張ったテントの下で出番を待っている俳優さんやスタッフが、私に軽く頭を下げた。「あら、私のことご存知？」と聞くと、俳優の仁科さんが「知ってますよ～！有名ですから。監督の追っかけでしょ？」……ムム、確かに。そうか、追っかけてって普通、若いアイドルを追っかけるギャルで、怒鳴りまくっている70歳の監督を追っかける中年は珍しいのか…。でも、無愛想な松田龍平さんまでも私を見て会釈してくれるのは、私の映画への熱い心が伝わったため？と嬉しかった。

浮田家をあとにしたロケ隊は再び山に登り、天上の人となった。ところが、6月19日、落石事故のニュースが入った。録音係の斉藤さんというかたが、直径2メートルもある落石に頭を直撃され、県警へりで県立中央病院へ運ばれたのだ。一番恐れていたことがついに起こってしまった、と足ががくがく震えた。斉藤さんは監督の長年の親友で、浮田家では機材を前に白髪にヘッドホンして座っておられた。

ロケは即中止になり、翌日ロケ隊は全員いったん帰京することになったことが、ニュースでも伝えられた。斉藤さんは長時間の大手術のあと一命をとりとめたが、いったい9割かた撮った映画は今後どうなるのだろう。このときは木村監督やロケ隊にとって最大の危機で、監督にとっては人生最高の苦しみであったことを、後に講演など語っている。事故が起こったら映画は止める、と宣言して始めた監督は、実際そう決断したが、結局苦境の中で俳優やスタッフから存続の方向に押され、2週間後に再開することになった。劔沢小屋の主人によると、この間、厨房で一人泣いていた監督の姿が忘れられないという。

7月3日、再び浮田家で100人のエキストラと共にロケが再開したとき、監督の顔は喜びの中に瘦せてやつれきっていた。

(続く)

旅と温泉

深谷 眞志

取材等の仕事で全国を回るが、温泉が好きで仕事が週末や祭日と前後したときなど、温泉に浸かるのを楽しみにしている。

もともと旅が好きで、小学生の頃から海や山へキャンプに出かけたが、社会人になってからは、もっぱら、勤務先の組合直営の保養所や、出張などでは官公庁などの共済組合の保養所を良く利用した。宿泊費も手ごろだし、料理もまずまずだったからだ。温泉がプールのような匂いが気になるようになり、次第に本当の温泉、今風の言葉でいえば掛け流し、所謂天然温泉に浸かりたいと思うようになっていった。どんな温泉施設に泊まれば、本物の温泉に浸かれるのか、インターネットに全国の天然温泉を紹介するブログが目にとまった。

料金も5千円程度から1万円まで、実際に本人が泊まった宿の様子が写真で詳しく紹介され、出張の際に紹介された宿に泊ってみた。宿は質素だったが、今まで経験したことない天然の温泉の持つ魅力に感激し、以来、出張の際、紹介されている温泉宿が近くにあると、立ち寄ることを繰り返した。しかし、参考に使っていたブログが閉鎖されてからは、自分自身で温泉をリサーチしなければならなくなり、最初の頃は探すのに苦労した。

あたりをつけ、旅館の名称をたよりにインターネットで、宿を利用された方のブログなどを参考にする。天然温泉を好む方はどこにもいまして、親切なコメントは大変有り難い。

捨てるほど膨大に湧き出る湧出量が豊富な温泉もあるが、大規模な温泉ホテルの広々とした露天風呂では、100%掛け流しの天然温泉を提供するには、そうとう無理があるような気がしてならない。衛生上から薬品を使用しなければならず、露天では冬期には温泉の湯温が低下するので、加水、加熱し、ある程度循環させなければならない。しかもプールのような容積の大きい大浴場では源泉だけで満たすにはおのずと限界がある。

私が好む温泉旅館や民宿は、温泉街の目立たない場所にある。いずれも古い木造建築やモルタル造りがほとんどで、お世辞にも建物や館内はきれいとはいえない。また、観光組合の宿の紹介欄に名を連ねていても、独自にホームページを持たない旅館が多い。

しかし、昔ながらの帳場がある古びた旅館には、独特な雰囲気があり、掛け流しの天然温泉が多い。しかも殆どが館内にあり、浴槽もこぼりで浴室全体もたいして広くない。

薄暗い脱衣場から浴室の扉をあけると、カル

キの匂いなど微塵もない。鼻をつく独特な温泉臭が漂い、鉄管や樋からちょろちょろ源泉が引かれ、周辺は茶色に変色している。平日は客も少なく、貸し切りの状態でこうした天然温泉の醍醐味に浸れる。

楽しみは、こうした湯に浸かったあとの酒肴で、わざわざ部屋に運んでくれる場合もあるが、広間で食事をする場合も多い。広間といってもたいていは畳12畳程度のこじんまりとした部屋で、他の泊まり客といっしょに夕食を頂くのも楽しみにしている。

たいてい私ひとりだが、たまに他にお客がいると、老夫婦と決まっていて、時々ま杯を酌み交わす。大規模な温泉ホテルの豪華料理とはまた違った趣の家庭的な料理が膳に並び、部屋の隅には味噌汁の鍋と炊きたての旨い飯がジャーに盛られている。

海が近い地域では、肴の味は格別なものがあり、なにより、実家に帰ったように安らげる雰囲気はこうした小規模な温泉宿すべてに共通している。

もっとも家族で行く箱根や伊豆はもっぱら勤務先の直営保養所を利用するし、湯量が豊富で横綱格の四国松山の道後温泉本館は別で、情緒も湯の質も文句なく第一級で木造建築の建物は貫禄があり風情さえ漂う。

足を向けた温泉地は数多くあるが、日本海側に位置する山陰の浜坂七釜温泉、大分の鉄輪温泉、福島飯坂温泉、越後の六日町温泉、最近富山に仕事で取材した帰りに立ち寄った宇奈月温泉には感激した。紅葉には一足早い10月末、仕事も無事に終わり、富山から富山地方鉄道に乗り換え宇奈月に着いた時は日もとっぷり暮れていた。

小さな温泉宿に相応しいこじんまりとした、とびきりの天然温泉が旅の疲れを癒してくれた。仲秋の名月の下、ちょうどその日は地元の祭りと重なり、旅愁を誘う素朴な祭囃子を聞きながらひとり地酒を傾けるという幸運に恵まれた。

映画「男はつらいよ」の寅さんがタオルを首にかけてフラッと出てくるかのような宿には、帳場があり、古びた階段も映画のシーンそのままだった。遅く着いた私に、親切で温かい宿のもてなしは四股に温湯がしみ渡るようで感激してしまった。

翌日、新魚津まで乗車した2両編成のクラシックな車両には私と数人の乗客のみ。窓を開けると、心地よい風とともに、運動会が行われているのか、車窓いっぱいには子供達の歓声が車内にとびこんできた。富山への旅は最後まで心に残る素晴らしいものとなった。

プロフィール

(社)日本自動車整備振興会
歴史作家

怖いお話しです

大凡(おおよそ)その数字であることを、お断りしておきます。

あくまでも平均値ですから、必ずそうなる訳でもありません。

何一つ問題なかったり、逆にもっと長期間、厄介な状態に陥(おちい)るかも知れません。

ある調査によりますと、「男性が6年～7年」、「女性が7年～8年」、命が尽きる直前まで病みながら、生き続ける時間だそうです。

あっちが痛い、こっちが辛いなど、ブツブツと文句をいってるか、通院しているか、最悪には、誰かに身の回りの面倒を見て貰っているか、つまりは、少しも楽しくない日常を意味します。

健康寿命が尽きた(健康体の終わり)後に、かくも悍(おぞ)ましい生活が死ぬまで続くとなると、考えただけでも恐ろしくなります。

聞きたくもない調査だからといって、逃げたところで始まりません。

真っ向、立ち向かいましょう。

死ぬ直前まで健康でいたい、……まあ、そこまできなくとも、病む期間の短い事を願うのは人情です。

どうしたらいいのでしょうか、……。

5年間の、我が体験記です。

ただ、酒好きの「生兵法(なまびょうほう)」ですから、割り引いてお聞きにならないと、ケガのもとに、……果たしてなりますかどうか、……。

「食事、運動、睡眠」が、健康を支える3要素だと言われています。

ただ実際は、『あ、明日からジョギングの開始』などと、運動に目を向けることがほとんどで、睡眠はスルーし、食事は意識的に遠避ける節があります。

それだけ「食」は食欲(どんよく)で、目標を立てても長続きしないということでしょうか。

これが、「ダメ」なのです。

何はさておいても、「先ず食習慣」から見直さなければなりません。

日常生活において人は、十分でないにしても最低限の運動(動)はするものです。

また、『どこそこの誰、睡眠不足で死亡』とするニュースは、聞いたことはありません。

この二つは、わずかながらも体内で、「安全装置」が働いているということかも知れません。

ところがです、「食」に関してはそんな能天気なことはいっておれません。

自分で意識して制御しない限り、危険帯に真っすぐ突き進みます。

平均寿命のかなり手前で健康寿命が尽きるのは、食習慣に問題があると(あったと)、一度決め付けて見て下さい。

路上生活者までもが成人病になる「日本」では、溢れるご馳走を前に、「食」に対する制御意識は無力化するでしょう。

だからこそ「減カロリー」、「反・腹一杯」の強烈な意識化です。

改善すべきポイントが、「3つ」あります。

「塩分、油分、糖分」、……この3品の直接的・間接的な摂取量を減らすことです。

減らすというより、激減させるのです。

“従来の100分の1の量に挑戦する”、……このくらいの意気込みが必要でしょう。

この3品は食欲を誘う、「旨みの素」であると理解して下さい。

旨いことは歓迎ですから、どんどん胃袋に詰め込みます。

3品の過剰な摂取が舌の感度を劣化させ、味音痴となった舌は更に強い3品を求めます。

こんな悪循環を続けた結果、そのツケが様々な症状となって現れます。

見掛けは恰幅(かっぷく)よく、健康に見える体であっても、その実、すっかり免疫力を失った、ひ弱なボデーに変わり果てているのです。

免疫力の低下を、一番喜ぶのは「病巣君達」です。

宿りついた彼らは、免疫力の弱さをいいことに、主(あるじ)が自覚出来る段階まで育ち上がります。

こうして、「病みながらえる更年期」に突入します。

タバコも酒もストレスも、免疫力を下げる要因でしょうが、3品の長期間の取り過ぎが最大であると、私の体は結論を出しつつあります。

最近「俺、体がちょっとおかしいな」と、60才を過ぎてからの自覚症状は、健康寿命が尽きつつある証拠です。

医者はいつもこう言います。

『タバコは、お止め下さい』、『お酒は、控えめにして下さい』、……と。

患者も、今以上に患うのは嫌だから渋々と納得します。

「タバコが問題、酒が問題」と、……医者と患者の馬鹿の二つ覚えといったら言い過ぎでしょうか。

免疫力の回復に向けて最も重要なポイントは、“長期戦を張る”とする意志です。

★相応の結果を得るためには、最低でも5年以上はかかる

このことを、肝に銘じることです。

健康商品の宣伝のように、“短期間に目覚ましく”とする、そんな体の修復はありませんが(あったらおかしいと私は考えます)、……3品減少作戦を開始して3年目あたりより、徐々にですが免疫力の回復が実感され出します。

この実感は、誠に頼もしいものです。

5年経過したら、更に精進して下さい。

健康寿命が平均寿命を追い抜きますから……？。

エエ、そんな馬鹿なことが、……その馬鹿なことを、ただ今実験中です。

あと100年ほどお待ち下さい、黄泉(よみ)の国から結果報告申し上げます、……ハ。

凡句楽